

東アジアの古墳副葬品と玉虫厨子にみる玉虫装飾の再検討

— 王権と仏舎利供養の視点から —

王映雪 (ハーバード大学/大阪大学)

古代東アジアでは、玉虫の羽根をしばしば美術工芸品の装飾に用い、法隆寺伝来の玉虫厨子 (7 世紀)、法隆寺金堂四天王像 (7 世紀)、正倉院宝物 (8 世紀)、及び韓国慶州・皇南大塚と福岡・船原古墳などの古墳 (5~7 世紀) において、その使用が認められる。玉虫の優れた装飾性はつとに注目されてきたが、単に華麗な色彩効果を発する工芸的な要素として扱われ、作品の解釈や美術史的意義についての議論の俎上にのることはなかった。しかし、現存する玉虫装飾品は日本列島と朝鮮半島の上位階級者の権威を示す「威信財」とみられる器物が多く、玉虫には装飾性のほかに象徴的な意味や社会的機能が求められた可能性が十分に考えられる。

そこで本発表は、玉虫装飾の代表作である皇南大塚出土馬具と玉虫厨子に焦点をあて、王権と仏舎利供養という文脈から両作品を再検討すると共に、玉虫は単なる装飾素材ではなく貴重な財物という性格を持つことを提示する。

皇南大塚古墳出土の玉虫装飾馬具 (5 世紀前半) は、現存する玉虫装飾品の最初期の作例である。本馬具は、朝鮮半島及び日本列島より組織的に採集された 5000 匹程度の玉虫を使用し、新羅王族直属の工房で製作されたと推定されている。『日本書紀』『古事記』によると、新羅は金・銀・彩色など光輝く種々の珍宝に恵まれる国とされ、皇南大塚を含む新羅王陵級古墳には燦然と輝く金冠、玉類、装飾馬具など、当時最高の技術で製作された威信財が数多く副葬された。このように、新羅社会では豊かな色相・光沢を好む美意識が働き、眩い素材を用いた器物が珍重され、財力・権力の象徴として機能したとみられる。数多くの玉虫で飾られた皇南大塚出土馬具は、その金属的光沢と絢爛たる色相により新羅王族の究極の美意識と王権を表象するものと言えよう。

一方、玉虫厨子のそれは、7 世紀の東アジアに隆盛を見せた舍利信仰との関わりが注目される。玉虫厨子須弥座正面の「舍利供養図」は、輝く蓮華のついた宝器・香炉・舍利壺・蓮台を中心とする華麗な供養場面を描き、側面の「捨身飼虎図」「施身聞偈図」と共に捨身、捨財の主題を表している。東アジアの舍利信仰においては、上位階級者が所有した貴重な財宝が次第に仏教經典に説かれる「七宝」、即ち仏に捧げる供養具として受容された。例えば、河北省定州北魏仏塔 (5 世紀) や百濟弥勒寺西院石塔 (7 世紀) などの舍利埋納遺跡では、王族の私財であった金・銀・真珠・ガラス玉が供養具として数多く納入されている。こうした供養文化を踏まえ、古墳時代に王族の財力・権力の象徴とされた玉虫を数千枚も用いて玉虫厨子を飾る背景には、玉虫を仏舎利に捧げる貴重な財宝として捉える意識が読み取れる。よって玉虫厨子において玉虫という財を献じる行為は、須弥座各面に描かれた彩絵と連動する形で、捨財と布施という理念を核とする菩薩行の実践を表している可能性が考えられる。